

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02290

研究課題名(和文)近代日本演劇の成立と発展過程におけるイブセンの理解と影響の再検討

研究課題名(英文)The reception and influence of Ibsen in the developing process of modern Japanese theatre

研究代表者

毛利 三彌 (Mori, Mitsuya)

成城大学・その他・名誉教授

研究者番号：10054503

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本演劇、通称新劇の台頭に寄与したイブセンの影響はよく知られているが、それがその後の新劇の発展にいかん作用したか、それが積極的な意味をもったか、あるいはもたなかったかについては、必ずしも明白にされてこなかった。それが本研究の目的であったが、その成果として、日本のイブセン理解は、他のアジアの国のそれとはかなり異なるものであること、そして日本ではイブセンの本質的な性質は十分に理解されないままであったことが明らかになった。そのことは、論文として内外の学術誌に発表したか、また、20数年前の私のイブセン翻訳を見直し、新たに注釈をつけて新訳として出版し、演出することでも、公にしてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代劇の父と言われるイブセンが日本の近代劇、すなわち新劇の台頭とその後の発展に寄与したことが、日本の近代演劇のあり方に対して、どのような意味をもったかを明らかにするのが、本研究の目的であったが、それが必ずしも積極的な意味だけではないことが明らかになった。それは、近代演劇史のみならず、近年盛んになってきた明治以降の日本近代の歴史の見直しに対しても、少なからぬ寄与をなすだろう。そしてそれはまた、今日の反ドラマ的な演劇の流行についてのプラスあるいはマイナスの評価をくだすことにも、大いに役立つに違いない。

研究成果の概要(英文)：It is a well known fact that the contribution of Ibsen to originate the modern Japanese theatre, shingeki, was greater than any other Western dramatists. But whether Ibsen's influence on the developing process of shingeki afterward has had a positive meaning or not has not been well investigated till today. This was what the present project tried to make clear. I have found through this project that Ibsen's reception in Japan has been not necessarily the same as in other Asian countries, and that Ibsen's drama, which is based on the tradition of Western drama history, has not been properly understood in Japan. I have made the result of my investigation in public with my articles presented in academic periodicals both domestic and abroad and with my new translations of Ibsen's plays and productions of them.

研究分野：演劇理論、近代演劇、比較演劇史

キーワード：イブセン 近代演劇

1. 研究開始当初の背景

日本におけるイブセン研究は、明治期半ばの鷗外、逍遙らによるイブセン受容の始まり以来、長く、西欧のイブセン理解の移入紹介に終始してきた。明治末の新劇の成立以降は、その上演方法も西洋の模倣であることを、むしろ良しとしてきたところがある。そのため、新劇史におけるイブセンの位置づけも、越智治雄(『明治大正の劇文学』1971)や藤木宏幸のイブセン受容の研究などの優れた論考、中村都史子の『日本のイブセン現象』(1997)のような比較文学的研究はあるものの、第二次世界大戦後の欧米におけるイブセン解釈のまったく新しい展開や、1970年代以来の現代演劇の新しい試みの中でイブセン劇を再発見しようとする欧米演劇界の動きには、ほとんど無縁のまま、旧態依然たる上演がつづいてきた。そして、近年の国際的な演劇研究者の集まりの中で、日本の演劇近代化あるいは新劇の歴史に驚くほどの興味が示され、そこにおけるイブセンの役割にも大いに関心が寄せられているにもかかわらず、我々はそれに新しく応えることができないでいる。そのため、一般の海外研究者の間では、日本の近代演劇成立過程について、月並みな、ときにははっきりと間違った理解がなされている。それは日本の研究の国際的発信の弱さによることでもある。今われわれに要請されることは、近代演劇におけるイブセンの真の意味を理解するとともに、日本独自のイブセンの読み方、演じ方の可能性を示すことで、世界のイブセン理解、ひいては世界の近代演劇の理解に寄与することではなからうか。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大きく3点あった。

(1)日本におけるイブセン劇の移入と上演を、演劇社会学的観点から再検討し、イブセン劇の近代日本演劇すなわち新劇におけるイブセンの意味を明らかにする。

(2)他国におけるイブセンの理解と受容を検討し、日本におけるそれと比較することで、イブセン劇の可能性をさぐり、比較演劇研究に寄与する。

(3)研究成果を海外で開催される会議やコロキウムで発表することで、世界の研究者との交流を行い、イブセンとそれぞれの国の近代演劇との関係について議論を交わす。それによって、近年、日本の近代演劇に対して高まってきた国際的関心に応えようとする。

たとえば、近年、世界的に民主主義体制の政治的意味が問われているが、まさにその問題を扱ったイブセンの『人民の敵』(1882)を、日本では1902年に、足尾鋇毒事件を背景にした翻案の形で上演した。そのことの意味や、また日本の新劇の歴史の中で、社会問題劇作家としてのイブセンが、実際にはどのように理解されてきたかを、新たな視点から明らかにする。

また、日本における戦前の演劇活動は、常に検閲の規制を受けていたにもかかわらず、欧米の少なからぬ都市で出版や上演が禁止されていたイブセン劇は、日本で一度も禁止対象になることがなかった。家族制度の崩壊や男女の深層心理的性意識を描くイブセン劇が、他の同様の問題を扱った劇は禁止された(たとえばズーデルマン『故郷』)にもかかわらず、日本では官憲に問題とされず受け入れたのはなぜか。このような演劇の文化社会学的な考察によって、国際的な近代日本演劇史の見直しにつなげたい。

3. 研究の方法

本研究を遂行するための方法は、大まかに次の3点に分けることができる。

(1)成城大学の図書館および国立国会図書館で、本研究に必要な邦語論文および諸新聞の記事内容を検討し、演劇社会学的視点からの分析を試みる。

(2)ノルウェーのオスロ大学には付属研究機関としてイブセン・センターIbsen Centerがあるが、そこには世界のイブセン研究文献があつめられている。そこに出張して、本研究に必要な資料を探索する。

(3)いくつかの国際会議で発表することを通じて、本研究の国際的意義を確かめ、研究水準の向上をめざす。

2017年度は、主に成城大学図書館の資料によって、日本の新劇の歴史の中で、イブセン受容の状況と、イブセン理解の仕方などを、ヨーロッパでの受容、理解のされ方と比較しながら、演劇社会学的視点から考察した。近年、ノルウェーで出版された新しいイブセン全集(Henrik Ibsens skrifter, historisk-kritisk utagave, 2006-11)を購入して成城大学図書館に納めたが、その編集責任者でオスロ大学名誉教授である Professor Vigdis Ystad は、30年来の友人であり、彼女との意見交換からは多くの示唆を受けた。それは本研究の意義を確かめることにも大いに役立つはずである。

2018年2月にインド、ジャイプールの大学で開催されたアジア演劇コロキウムにおけるアジア諸国の研究者との交流からも得るところは多かった。2018年9月にノルウェ

ーのシェーエン(イブセンの生まれ故郷)で開催された国際イブセン会議で、イブセンと日本演劇とのかかわりを、今日的視点から再検討する論文を発表し、その後、暫時オスロに滞在して、オスロ大学付属機関であるイブセン・センターで、世界のイブセン受容についての資料を検討した。

4. 研究成果

2017年度には、マニラの国立フィリピン大学で、アジア演劇コロキウムが開催されたが、そこで私は司会をつとめ、アジア各国からの出席者の間で、アジアの近代演劇について活発な議論が行われた。またこの機会に、マニラの別の大学セント・トーマス大学の古い友人の依頼で、私の演出した異文化演劇上演「ふたりのノーラ」に関する講演を行った。

この年には、長野県伊那で演劇論講座の連続講義(3回)を行ない、日本の近代演劇の成立から戦後の状況に至るまでを講義した。講義後の聴衆との交流も、私の研究を一般に広めるためには、非常に有益であった。

2016年に演出したイブセンの『人民の敵』の作品解釈および舞台表現をもとに書いた論文を、成城大学文芸学部の紀要『成城文藝』に寄稿し、ほとんど同じ資料に基づく英語論文を、イギリスの北欧文学学術誌『スカンジナビカ(Scandinavica)』に投稿した。英語論文は採択され、17年末発行の号に掲載された。

2018年度の研究成果は主に、内外の演劇学会における口頭発表と論文発表の形で公けにした。7月にセルビアのベルグラードで国際演劇学会2018年年次大会があり、そこでアジア演劇ワーキンググループ・コロキウムのコーディネイト及び司会をつとめたが、そこでは、他のアジア諸国の近代演劇特有の問題が論じられ、植民地経験のない日本の近代演劇の特殊性も浮き彫りにされた。

そもそもわたしのイブセン理解は、大学時代のギリシア悲劇上演の経験と密接につながっている。このことを改めて考察したのが、2017年10月の成城大学における講演会『古代ギリシャー遙かな呼び声にひかれて』での私の講演で、2018年には、この講演会の内容を単行本としてまとめた。

2019年度は、主に日本の近代演劇の成立、発展の過程とイブセン上演とのかかわりを調べ、その成果をもって国際会議等で欧米の研究者との交流を図りたいと考えていたが、パリで行われる予定だった国際演劇会議の世界大会が中国の上海での開催に変更され、また3月にベトナムのハノイで開催する予定で進めていたアジア演劇会議は、新型コロナウイルスの流行により中止となったために、研究成果を発表する機会を失った。しかし、その研究の一端として、イブセンの日本での翻訳を調べることができ、その上に立って私のかつてのイブセン翻訳を見直し、日本における受容の意味を考えることができた。その成果としての『ゆうれい』改訳を発表したが、それに基づいて、2020年2月に『亡霊たち(ゆうれい改題)』の上演に際して演出を担当した。これによって、イブセン劇の日本での歴史的かつ今日的な解釈を検討し、その成果を論文として準備することができ、本研究期間を1年延長して、2020年7月にアイルランドで開催が予定されていた国際演劇会議の世界大会で発表するつもりでいたが、この大会は新型コロナウイルス感染拡大のため21年7月に延期され、しかもオンライン会議になった。しかしそこで発表する予定であり、また、その論文は国際イブセン研究誌に投稿することも考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 毛利三彌	4. 巻 68
2. 論文標題 演劇に劇場がなぜ必要なのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 演劇学論集	6. 最初と最後の頁 21-34、29-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuya Mori	4. 巻 Vol. 9, No. 2
2. 論文標題 Double Nora: A Japanese Intercultural Performance	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 UNITAS	6. 最初と最後の頁 3, 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 毛利三彌	4. 巻 第240号
2. 論文標題 イブセン作『人民の敵』 異文化社会学的視点	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 103, 139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mitsuya Mori	4. 巻 Vol. 56 No. 2
2. 論文標題 Ibsen's An Enemy of the People: An Inter-sociocultural Perspective	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Scandinavica	6. 最初と最後の頁 26, 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Mitsuya Mori
2. 発表標題 Who is the Enemy of Society?: Seeing Ibsen 's An Enemy of the People in Japanese Perspective
3. 学会等名 International Ibsen Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuya Mori & Yasushi Nagata
2. 発表標題 Duologue: Expanding or Going beyond the Boundaries of Theatre
3. 学会等名 IFTR Asian Theater Working Group (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 毛利三彌
2. 発表標題 演劇に劇場がなぜ必要なのか
3. 学会等名 日本演劇学会秋の研究集会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuya Mori
2. 発表標題 Who is the Enemy of Society?: Seeing Ibsen 's An Enemy of the People in a Japanese Perspective
3. 学会等名 Intenational Ibsen Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 毛利三彌、天野文雄	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 258
3. 書名 東アジア古典演劇の伝統と近代	

1. 著者名 毛利三彌	4. 発行年 2017年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 380
3. 書名 演劇を問う、批評を問う	

1. 著者名 Yasushi Nagata, Ravi Chaturvedi, Mitsuya Mori	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 276
3. 書名 Modernization of Asian Theatres: Process and Tradition	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------